

長雨の影響で収穫ができない圃場の対応

今年は、秋雨前線の影響で、長く雨が続きました。一部水田では、倒伏が著しく、穂発芽が発生し収穫できないことも懸念されます。刈取りができないと圃場に落ちた籾は漏生イネになります。また、稲わらのすき込み量が増加すると、硫化水素などのガスが発生し、稲の根傷みや生育不良を起こす恐れがあります。水稻の刈取りができない圃場は、腐熟促進資材を活用しましょう。

具体的な対策

- ① 水田に落ちる籾が多くなると、漏生イネが発生しやすくなるので、**次年度は同一品種を作付けしましょう。**
- ② **品種を変更する場合は、漏生イネを減らすため移植を遅くします。** 荒代かきをした後 20 日程度の期間を置き、漏生イネの発芽を促します。その後、発芽種子を本代かきで土中に埋め込みます。
- ③ やむを得ず刈取りできず、収穫できない圃場では、籾も含めた有機物のすき込み量が増えるので、**フレールモア等で細断した後、腐熟促進資材を施用し稲わらの腐熟促進を図りましょう。**
- ④ 籾も含めて全量をすき込んだ場合、稲わらや籾が微生物により分解した窒素は水稻に吸収利用されます。コシヒカリを作付する場合には、基肥の窒素を減肥した上で生育状況をみて窒素追肥すると良いでしょう。なお、過去には、通常どおりの施肥量でも倒伏する危険性が少ないとの事例もあります。
- ⑤ 漏生イネに対する除草剤の選択については、**宮農ニュース第 3319 号（令和 8 年 4 月 30 日発行：「雑草イネが発生した水田の防除対策について」**を参考にしてください。

秋耕は刈取り後早く行いましょう！

1. 秋耕の効果

① 稲わらの腐熟促進によるガス湧きの軽減

水田にすき込まれた未熟有機物（稲わら）は、水稻の作付け中、気温の上昇とともに土中の微生物による分解が活発になり、その際に有毒な硫化水素などのガスが発生し、稲の根傷みや生育不良を起こすことがあります。このため、秋耕を行うことにより、稲わらを土中にすき込み腐熟を促進させ、しっかり分解させることが重要です。

② 稲わら由来の養分の土壌へのすき込み

稲わらには、ケイ酸やカリなどの水稻の生育に必要な養分がたくさん含まれています。秋耕を行うことにより、稲わらを土壌にすき込むことで、土壌の肥沃度を高める効果があります。

③ 漏生イネ対策

稲刈り後すぐに秋耕を行い、地表の種子を土中に埋め込むことにより、秋の間に種子の発芽を促し、その後の冬季間の低温でこの芽生えを死滅させる効果があります。



2. 秋耕のポイント

① 秋耕は稲刈り後すぐ実施しましょう！

稲わらの分解を行う微生物は、気温が 15℃を下回る 12 月～3 月頃は活動が弱まってしまいます。稲刈り後すぐに秋耕を行うことで、稲わらの腐熟に十分な期間を確保することができます。

② 土壌に酸素を補給しましょう！

秋耕をする際は、**10 cm くらいの深さで起こす**ことで、土壌に酸素が取り込まれやすくなり、稲わらを分解する微生物の活動が活発化することで、腐熟効果を増大させることができます。高温対策として期待される深耕も含め、圃場が乾いてから実施しましょう。

③ 腐熟促進資材や土づくり肥料を活用しましょう！

稲わらの主成分は、セルロースやリグニンなどの分解されにくい繊維質であるため、秋耕の際に**腐熟促進資材などを活用すると**、より効率的に分解を促進させることができます。

なお、アルカリ分やケイ酸を含む「**土づくり肥料**」を施用することも効果的です！